

This Page Is Inserted by IFW Operations  
and is not a part of the Official Record

## **BEST AVAILABLE IMAGES**

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,  
please do not report the images to the  
Image Problems Mailbox.**

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平4-276286

(43)公開日 平成4年(1992)10月1日

(51)Int.Cl. <sup>8</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 3 H 33/26		A 7265-2C		
A 6 3 B 65/10		A 7040-2C		
A 6 3 H 33/00	3 0 3	A 7265-2C		

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全 9 頁)

(21)出願番号	特願平3-120701	(71)出願人	391025121 大橋 裕朋 山口県防府市戎町1-8-27
(22)出願日	平成3年(1991)3月1日	(71)出願人	591109670 大橋 京子 山口県防府市戎町1-8-27
		(71)出願人	391025132 古城 和美 山口県防府市戎町2-2-9
		(71)出願人	591109681 古城 都 山口県防府市仁井令419-2
		(72)発明者	大橋 裕朋 山口県防府市戎町1-8-27

(54)【発明の名称】 回帰磁界の磁気単極による浮上玩具

## (57)【要約】

【目的】本発明の目的は、全く新しい移動手段、物体移動に於ける概念の全面的な改革を實事にある。惑星近郊では反物性により浮上し、遠隔地にも殆どエネルギーを消耗せず移動し、その推力や加速力も激大なものとなる。宇宙空間にも適応する作用なので、自動車は勿論の事、現在のジェット機やロケットは最早、過去の遺物となる。

【構成】機体構成原子全般のスピンの反転が要である。その1手法として本出願では、回帰磁界を構成する昇降磁石を用意し、その鉛直方向に、原子レベルでの軸性スピン反転用放電を行い、これを制御して、任意の方向に移動可能とした。一般用語で言えば『UFO』だが、信じ難い事にも事実、超伝導体の如く、書て行われた実験でも、既に幾パーセントかの質量減少が確認された。僅かと言え僅かだが、『質量減少』と言う事自体、現代物理からは奇跡なのである。それが現実になってしまった。後は、試行錯誤の積み重ねの問題である。

## 【特許請求の範囲】

(特に形状を問わない) 機体の任意の円周方向に、機体を環状に帯磁させる為の回線(循環)磁界を形成する界磁コイルを用意し、この磁界の構成する原子の軸性スピン方向を反転する様に、機体頂部上方陰極より底部に向け、電子を放電(この回転を、放電場の回転で行っても、局所的磁場変動回転で行っても良い)事で、反物性とポテンシャル・エネルギー推力を獲得して浮上、推進する装置である(説明が長くなるので、明細書15頁中段から、段落

【0003】に指定して行う)。

## 【発明の詳細な説明】

## 【産業上の利用分野】

【0001】この発明は、万物の変遷が究極的には量子的・立体的スピンを有する電磁現象に基づいて運営されている事に注目し、現実的手法としては、主に極性(磁界の量子的)スピンを反転すれば、時定数的にエネルギー状態が負となると共に、従来、何も無いとされていた真空が、実は、高次元に於いては超等級の質量性とエネルギーを持つ場として在り、例えばアハラノフ・ボーム効果にも見られる様に、これに対してもポテンシャル・エネルギーの形で影響を持つ事を利用した、反力場及び場推進装置の一つである。この電磁作用は、電界・磁界と緩やかな相互作用をする。宇宙の構造は、昭和62年度からの種々の斥力既の特許出願明細書にも一部記載してきた通り、多次元間で多重螺旋が入れ子の等比構造を成すものであるが、これ等の大系を『虚量物理観』と呼称する。本発明の構造は以外と簡素なもののだが、理論的な事では非常に難解な為、説明が長くなるのを、ご了承願いたい。さて、真空のこの性質(超等質量性)はプランク長 $1.67 \times 10^{-33}$ センチメートル程の領域になると急に強調されてきて、其処に作用するのが、今書いたポテンシャル・エネルギーの現れだと言え。但し、普通これは、極微の世界の『揺らぎ』としてしか垣間見る事は出来ない。それは、これが低次元宇宙の中に折り畳まれた、高次元宇宙の力だからである。しかしこれは、私の憶測から言っているのではない。例えば、この事については、1947年既に、イギリスのランバートとラザフォードが、水素原子核を周囲する電子の軌道が、 $10^{-12}$ センチメートルと言うスケールで、信じ難い程、ガタガタと揺さぶられている事を見発していた。勿論、それ以上の認識は、当時は無かったが、例えば、現在注目を集めている超紐理論がこれに類似している。高次元宇宙とは、低次元宇宙の、極微の世界の中に折り畳まれていて、通常空間は時間軸を加えると円筒形を成すが、これを『相空間』と呼称する。ただ虚量物理観では、四次元以降の宇宙空間が、今も健在であり、単に、我々の三次元的知覚には捉えられなかったのだとしている点が、超紐理論と違う。虚量物理観の判断したこの事実は、それ等の科学者の発見が保証していると言え

う。1984年には、R・ラザフォードも極近の電極から、自発的な電気エネルギーの発生を確認したと論文で述べている。因みに、この電荷的エネルギーは、非常に小さな領域でしか観測出来ないが、虚量物理観に於いては、素粒子レベルの空間弾性は圧力の3乗に比例し、電荷弾性は距離の4乗に反比例する性質を持つ。高次元の力、つまり四次元以降のエネルギーを、三次元のエネルギーや作用に単純に置き換える事は出来ないが、J・ホイラー博士の数値から換算するならば、真空1立方センチメートル当たりの総エネルギー量は何と、 $10^{11.5}$ エルグ、質量換算とすれば、 $10^{24}$ グラムにもなる。一例として太陽が挙げれば、この全質量さえ、 $10^{33}$ グラム程にしかない。だから、もし、それを全て開放したとすれば、我々の住む様な太陽系を140億個も有する銀河を、幾つも吹っ飛ばせる程の量になってしまうのである。勿論、その時空のエネルギー総量を、自由気儘に用いる事が出来る訳ではない。実際、我々の知覚には、真空は何も無いに等しい。しかし、その、少なくとも1部分には、今の技術でも充分、程やかな影響を与える事が出来るのである。ただ、この「程やか」と言う言葉は、我々の住する三次元では「莫大な」と言うに等しい。その作用で、この装置は、いともたやすく地上から離れて浮上するであろう。その駆動の性質上、僅かに低い唸り音を発生するだろうが、基本的には無音で、端的な表現をすれば、これは正に『UFO』と呼ばれているものの、1形態に他ならない。

【従来の技術】私は、幾年も前から、数々の論文を、或る重要な意図の下に、複数の科学者に送り、「UFOは超伝導現象に関係する」事を漠然とした形で示唆してきた。それは、彼等が私の目論見通りに実験をして、出来れば失敗してくれる事を望んだからである。その中には、科学技術庁研究開発局や筑波・電総研の研究者も含まれている。さて、これは、ごく一部の人々にしか知られていない事実だが、そうした昭和末期、正統な科学者が超伝導を通じてUFO実験をしていた。勿論、それは失敗に終わったのだが、私に言わせれば、それは最初から失敗するしかなかった。その詳細については、此処で述べる必要性を感じない。ただ、そうした科学者が、その失敗を大々的に報ずる訳が無いのは、言う迄も無かる。それでも科学専門誌バリディにはホンの数行、実験失敗を伝える記事が載せられたのである。私もUFOを説く時に超伝導に言及するし、その実験も試みた様に、確かに、超伝導の示す性質はUFOの原理を解明するのに、非常に重要ではある。だが彼等は、その電磁氣的性質にばかり頼り、物性云々と言う所に視点が無かった。例えば現代物理では「真っ直ぐな線に電流を流すと、右に回転する様な磁界が生ずる」と言うが、これは「右回りに『螺旋』を描く磁界を生ずる」と言うのが量子的に正しく、従来の性質の他に、第3の性質が有る事を現代物理は見落としている。虚量物理観では、素粒子の性質

を決める、最終的粒子である電荷でさえ、「6次元スピンのテンソル第3・第4成分が表す、5次元スピンとしての波動である」、としている。これはトロイダル（トラスとも言う）状を成すが、その高次スピンの拡散した「場」の大きさが、現代物理の諸法則の限界値であるプランク長なのである（但し、ディラックの真空を四次元ではなく、三次元の虚空間に充てる場合は、それぞれ1次元ずつ数字を減らして呼称する。その理由については、別途、拙著論文を参照頂くとして、此処では特に触れない）。早い話、「電磁気現象の結果を云々しても、解答は得られない。その作用機序（作用が生じる時の様相）を研究するべきである」と言うのが、私の意見である。とはいえ、そういう概念は現代物理の諸理論には殆ど無かったし、その為に失敗した。現代物理からこの量子的現象を解明するには、ヘリウム3の超流動も好例である。つまり、本当の反物性体は、磁石の存在など無くとも物体に反発して浮上する。此処で聡明なる者は、『酷似の作用が、全く違う原理に基づいて顕れる事実』の有る事を悟らねばならない。例えば「戦争はいけない」とは誰もが言うが、立派に成人した大人と幼児では、その想いの奥行きや内容に、雲泥の差がある事は言わずもがな、であろう。現代物理は、電気と磁気の性質が、余りにも好対照の関係に有る事から、電荷と言う粒子的実体が有る以上、磁気にも同様な粒子的実体『モノ・ポール』が存在すると信じ込んでいた。しかし虚量物理観では、電荷さえ、一つ上の次元では螺旋を描く波動だと断言しており、実は、その次元での回帰（螺旋）スピン場が電荷なのである。これと同様、磁気は、この次元にベクトルとして現れているが、その回帰ベクトルが、もう一つ下の次元、即ち、二次元での物的存在モノ・ポールなのである。即ち、磁気モノ・ポールとは、従来の科学者が思っていた様な『North単極』ではなくて、本当は、回帰（循環）する『Non-pole単極』なのである。勿論、「回帰スピンも、実際には単なる回帰（循環）ではなく螺旋を描いている」と述べた様に、これにも、二次元宇宙平面の表裏を決定する極小スピン量があり、現時点では、これを $10^{-16}$ センチメートル程度と踏んでいるが、宇宙の全ては、この様に複雑に入り込んだ、立体的スピン＝螺旋＝の重量が仕組んだ現象なのであった。例えば、電線を流れる電流が生ずる電磁界の事を考えてみよう。この電流が生じる電磁界は、光速 $C=30$ 万km毎秒（ $3 \times 10^8$  m/sec）にも達するが、実際に電線を流れる電子速度は、仮に導体半径を1mmとして1アンペアの電流が流れているとすると、その速度はたかが0.何mm毎秒（ $X \times 10^{-11}$  m/sec）と言う程のものに過ぎない。此処には $10^{-11}$ 程もの開きがあるのだ！さて、この様な理解も確かに業績を上げつつはあるけれども、現時点では『メタ・フィジックス（超物理学）』の事であって、一般には理解が困難と思われる。しかし現象として、実地

に実験して、確認出来るものだから仕方がない。しかし、そういった理解を此処で一々述べていては、願書が幾百頁にも及んでしまうので、詳しくは拙著『プロジェクト・セザール』をご覧頂くとして続ける事にしたい。で——超伝導現象の量子的（立体的）解析の結果、示唆される事になる、現実的UFO＝本発明＝の浮上についてだが、その成功の為には、電磁気を用い乍ら、その作用が、現象に対して支配的にならない様に配慮する必要がある。つまり単なる、マクスウェルの電磁方程式には直接には出て来ない、『ポテンシャル・エネルギー』の方に着目しなければならない。トンネル効果と言うのも、その顕れの、一つの形態である。この力は、穏やかに電磁的作用もするが、そのみに留まらず、重力の様に、万物にも作用する力である。光線は不透明な物体に、電磁波は遮断板に、放射線は鉛によって遮断されるが、このポテンシャル・エネルギーの場合、如何なるものも、この作用を受ける事を免れない。勿論、有機体や石ころにも作用を与えるのである。類似の作用として、松下通信社の杉山敏樹氏が、全く別の視野からアプローチして居られる。一本の短いダイポール・アンテナの、波長と関係した或る至近距離へもう一本のダイポールを用意すると、電力としては輻射されないが、通常とは鉛直になる、アンテナ・エレメント軸方向へ、電荷に作用すると共に、それ以外、即ち万物にも影響を与える縦波の生ずる事を、発見されたのである。だが、これ等を今、在りの儘に説明しても、そう易々とは理解し難いものがある。だから、本発明について結果として認められる、最も低次元な現象について言及するとして、それを誠に回りとどく、しかし平易至極に言い換えれば、『UFOには、現在の超先進的科学者が推測する程の電力さえも必要ない。現実には浮上するUFOが、現在開発の進んでいる、船舶に於けるMHD推進法と比較してさえ、比推力の点で、圧倒的な電力を消耗する事は、決して無い』と言えるだろう。これは、高性能な超伝導磁石の様な、強大な磁力を発散する必要は特に無いし、また、それに対応する程の莫大な電力も供給していないのに浮上するのである。信じ難い事だろうが、これが現実なのである。ただ、電磁気の実用の仕方が、特殊と言えは特殊で、従来の固定的物理観からは出て来ない事実だけが有る。UFOは、確かに超伝導や超流動現象に示唆されるが、現在の認識に於けるもの程、作用次元の低いものではない。いや、正確には、現代物理は未だ、超伝導理論の真相すら理解してはおらず、例えば、この理解が充分である者は皆、現代物理の大半を書き直さねばならない事に気付くであろう。「確かに、実際に起きる現象を、既存理論では上手く説明し切れずに、現代物理は窒息している」と言うのが、科学者達の偽らざる認識である。超伝導の本当の原理も知らない科学者に、その偉業が成せる筈は無かったのであった。超伝導体について言えば、原子間で必ず、導電層（体）と誘電層（体）が極

性スピンを干渉させ、差動原理によって、導電層の極性スピンが反転している。これは、立体的な現象なのだ。此処は、昭和62年以降の出願物件明細書に記載の通りである。

【発明が解決しようとする問題点】この理解は、現代物理から見ると「重力の克服」と言う事になるが、実は、従来の重力観は、間違っている。つまり、人々に真空と呼ばれる空間には「物性無きエーテル」が存在するのである。それ無くして重力の伝播は有り得ない。漸く、その事を言う科学者が私以外にも幾人か出てきたので、喜んでいる。とはいえ確かに、過去の実験によって証明された様に、我々の認知する形でのエーテルなるものは存在しなかった。その実験については、私も、何も文句を言う事は無い。ただ、科学者のエーテルに対する概念が、余りにも物質的過ぎただけである。その証拠に「真空には何も無い」と言われてきた。ついでに言わせて貰えば、現在の高次元観も、余りにも物質的過ぎる。だが、私の説く虚量物理観の、高次投影観からすると、前述の如く、超降級の性質を持った（中性）真空が、我々の技術や認識には無かった、広大な手つかずの、エネルギーに満ち満ちた空間として存在しているのである。言い換えれば、我々は真空から莫大な量のエネルギーを抽出出来る。此処には磁力や放電が必然的に関わってくるだろう。因みに、高次元は既述の理由によって、高い圧力により、高い振動数に、より容易に門戸を広げてくれる性質が有る。取り合えず、その性質を、従来とはまた別の意味に於いて、エーテルと命名しても良いだろうが、此処に注意が必要である。つまり、少なくとも一つ上の次元の光速 $C$ でさえ、我々の知る、唯一の光の速度である、秒速30万キロメートルの $10^{10}$ 倍以上の速度を持つだろう。その上の次元の光速 $C$ は更に速いが、ただ、我々の認識では最早、光とは呼ばない。そして、この3次元宇宙空間の真空は、未知の物質で溢れている。それが何かと言えば、極性スピン成分（2次元の光速 $C$ になる）を喪失した、回帰（循環）成分だけの素粒子の元、陽電子素と電子素の結合したボーズ粒子の海なのである。これは真空崩壊説からも導かれる様に、「二つのフェルミ粒子が、一つのボーズ粒子を構成する」と言う事でもあるが、これ等が、あたかもブラック・ホールの如き様相で存在している。この空間には、確かに、我々の尺度で言う「物質」は何も存在しない。其処でこの空間を、暫定的に「場」と呼べば、これは場推進システムと言う事になる。しかし科学者がもう少し目を見開けば、この「場」に対する理解が急速に得られるであろう。例えばごく近年、ボイジャーによる惑星探査の結果、どの惑星もストロボの様な、パルス状の拡散する電磁波と、灯台の様に回転するビーム状の電磁波の二つが存在する事を突き止めたが、これが惑星自転の元になっているのである。言い換えれば、虚量物理観の様な高尚な理解など無くとも、惑星の運行の

法則を学べば、UFOは作れると言う事になる。事実UFOは、先端科学知識に到底及ばない程低いレベルの、現代工業技術からさえ充分に作れる。それは良いとして、私は、そういう惑星探査も何も無しに、その事を十数年も前から知っていたのであった。書で、私は間近にUFOを見た事が有る。頭上10m程の所に浮いているそれを、暫くは観察したものである。1982年秋、九州・瀬の本高原に現れたのは、物理学的にはちょっと不自然な、4相駆動のアダムスキー型UFOであった。あの着陸ギアとか呼ばれるものは、姿勢制御の為に有るものなのである。だから機体の安定の為に、中国古来の器「鼎」に見られる様に、三回対称が最も安定した形である。つまり3相駆動である。ところが、そいつは4相駆動だったのである。アダムスキー型UFOについて言うと、何方かと言えば偽者とされるアダムスキー氏ではあるが、「アダムスキー自身の真贋問題と、この型のUFOの実在性の間には、相関関係は無い」と見るのが、真に科学的な態度であろう。事実、私も多くのアダムスキー批判者に対して、誠に都合が悪い事を熟知していながら、この目で見てしまったのだ。現に見てしまったものは、正直に「見た」と言う他有るまい。後で、私は深く落ち込んでしまった。さて、こうして反物性やポテンシャル・エネルギーを獲得した時、我々が最初に思い知らされる事は、「速くへ行くには、膨大なエネルギーが要る」と言う従来の常識が、全く見当違いな思い込みだったと言う事であろう。UFOは、一度浮いてしまえば、仮令地球の裏側へでもスライド飛行するのに、僅かしかエネルギーを必要としない。力場を僅か傾ければ、後は落ちる様に滑って行く。言葉を換えれば、遠くへ移動するよりも、垂直浮上する方にエネルギーを要する。つまり、移動には、浮上以上のエネルギーは必要無い。しかし重要な点は、その何れもが我々の過去の認識に反して、そう大したエネルギーの消耗をしないと言う点に有るのである。しかも、電磁現象による飛行を行う（とは言え、この浮上原理や理解は、現代物理の範疇外のものであるが）事は、「内部慣性限度内の急加速・急減速であれば、飛行速度に限界が無い」と言う事である。また、応用の仕方によっては、内部の慣性も消せる。我々は、今、常識外れの機動力を獲得しようとしているのである。

【問題を解決する為の手段】これは、物性が、原子等の量子的（立体的）スピンに特定されている事実を理解し、差動原理によって、軸性・極性スピンの、一方を反転してやるものである。それは、ゲージ変換や陽電子の質量、ニュートリノの謎を解く鍵にもなる考え方である。これは「粒子も皆、より高次元では波動であり、時間を空間と切り離して考える事は出来ない」、と言う意味である。また実際、そう説く『ミンコウスキー宇宙』の形は、ゲージ変換にも適用し、虚量物理観では、メビウスの帯もクラインの壺も、トポロジー（位相幾何学）

から説明されると説く。この考え方の下に発明された装置は、主に極性スピンを反転させるが、それは素粒子レベルでの表記であって、原子レベルでは電子の公転軌道の反転と言う事になる。そして、実際には原子レベルが問題となる。確かに、その力場の発生の為に電力や磁力を用いにするが、駆動のみに関しては、決してそれ以上の必要性を感じない。よって、超伝導体の様に、反発すべき磁石といったものは一切、必要としないし、MHD推進法による円盤型飛行体浮上の時の様な強大な電力、即ち、一般家庭20~40万戸分もの馬鹿げた電力も必要無い。私の知る所では、現在既に、室温でも作用を生ずる常温超伝導体が、この日本で見つかり、4%の質量軽減が見られたと言う。それは事実だろうが、普通の超伝導体では、どんなに頑張っても浮上迄はこぎ着けないだろう。既述の如く、自発的超伝導は、導電原子と誘電原子が対となって、既に出した特許出願明細書に記載の様な様相で生ずる為、スピン反転原子が、全体のごく一部に限られている為である。とはいえ、私の前願に記載のスバタリング法等を用いて、極限に迄、効率を高めれば、有効率が上がるので、かなりの質量減少が見られるだろう。本発明の駆動と言う事であれば、惑星上空では単に、機体原子全般のスピンを僅かにでも反転してやるだけで良いのである。だから、それに費やされる電力が、決して理想的超伝導体の限界値を上回る事は無い。商業ベースで考えとしても——例えば『電車』の様に——充分、実用範囲であろう。超伝導コイルを大規模化し、それに流す電流を増やせば、蓄電池としての機能を付与する事が出来る（現在、国家的プロジェクトとして進行中である）が、その時の問題は、強大な磁力の生む圧力によって、超伝導コイルが破壊してしまう事である。それでも超伝導体は浮かない。しかし、この発明品にそれだけの大電流を所定の方法で流せば、我々の常識を完全に逸脱した速さで、大気圏を飛び出してしまっているであろう。但し、その時必要とされる『具体的な』電磁エネルギー総量は残念乍ら、これから実験をして特定される事になる。それは、アハラノフ・ボーム効果（虚量物理観では理解範囲内の事だが、現代物理では『謎』の現象の一つである）同様、全く新しい理解による発明であるので、通説として存在する現代物理の範疇からは説明し得ない事であって、致し方あるまい。しかし何れにせよ、後の余力として、機体に蓄電池の効果を持たせる等の事が出来る程、ゆとりが有るだろう。

【0002】では理論的説明に入ろう。これ迄の出願物件の場合、UFOの駆動条件として $n\lambda \leq 2\pi r$ （単なる浮上の為には $n=1$ ）の多重公式と、波動関数 $\psi = C/2\pi$ が有ったので、それをその儘適用すると、直径1mの円盤を浮かせるのに必要な角周波数は95.4269MHz（メガ・ヘルツ $\Rightarrow$ 1,000,000サイクル毎秒）となり、小径2cm、5mmピッチのトリガー・

コイルを機体円周に用いる時必要な駆動周波数は、実に1,203GHz（ギガ・ヘルツ $\Rightarrow$ 1,000,000,000サイクル毎秒）にも及ぶ。こんなに高い高周波が必要では、機体の構成も難し過ぎて、素人には非常に実験がやりづらい。虚量物理観の高次投影観では、極性スピン速度は軸性スピン速度（この次元では、ほぼ光速）に比べて非常に遅いので、この反転をしてやる事でUFOは浮く。しかし、これ迄の私の出願物件は、電子の放電に作用の重きを置いてきたので、前述の様な結果になってしまったのである。尤も、それでも、この法則（虚量物理観の言う、UFO浮上の多重公式）を惑星規模で適用すると、電離層の位置に応じて、大体数Hzから十数Hzになる。これは、現在シューマン共振として知られるが、これは人間の脳波にも対応している。私がその事に気付いたのが、1974年春の事であった。また、日本には、清田益章と言う超能力者が居るが、彼の脳から、四十数MHzの電磁波が発生していたとの計測結果が有る。この法則を当て填めると、これは直径2m程で得られる数値であり、丁度、仏教で言う、我々の『結界』程に他ならない。そして我々は、此処で思い起こそう。「極性スピン反転の為に磁石（磁界）を用意し、これに作用を分担させたらどうだろうか？」と。磁気は、この次元ではベクトルとして現れている。それだけに、何かの仕事させようとするれば、電界の百倍もの容量が有るのである。虚量物理観は、磁気モノ・ポール（単極子）とは、この次元では『回帰（循環）磁界』の事を明らかにした。其処で、磁気ベクトルの向きを描えるべく、機体を回帰磁界を構成する様に帯磁するか、円周方向に界磁磁石を用意して機体を帯磁させてやる。この場合、機体上部から見て、反時計回りになろう。後は、機体上部からの面状放電場が磁界に強度差を設けて、それ等の何れか、或いは双方をユックリ回転させてやれば良い。これには前願の様にトリガー・コイルを用いても良いし、回転リムを使う方法も有る。また、界磁コイルへの通電方法を工夫しても良い。それは、機械的手法でもトランジスター式スイッチング回路でも、何でも出来る事である。本発明に用いられる電源は、放電が機体の上下間円周で充分行われる必要が有る為、電圧としてはかなりの高圧が必要だが、この操作の結果、周波数的には、先ず機体表面に面状放電を行う為に必要な100KHz（キロ・ヘルツ $\Rightarrow$ 1,000サイクル毎秒）程度の周波数が有れば良く、角周波数も駆動周波数も極めて低く出来る事となった。実際に我々が目撃する実際のUFOを研究する人々にあっては、「UFOが機体を放電場で包もうとする場合、大気中では周囲の空間が絶縁増してしまう為、機体の周囲には真空の層を作るのだ」とか言われるが、本発明は、その様なシステムを持ってはいない。また、特に必要も無いと思っている。ただ、同様な事をさせるのに、普通の放電では当然駄目だ。当発明では『面放電』をさせているのである。基本

的電源としては、前願より、私は『高圧コロナ・アーク放電』で高周波を得ている。単なるアーク放電は低電圧大電流で生ずるが、この放電は、超高压電流が自発的に絶縁崩壊して生ずるもので、実に簡単な回路でもVHFからUHF帯( $3 \times 10^7 \sim 10^9$  Hz)の高周波を得られる。前願では、核磁気共鳴吸収方式の整流器を用いて所望の周波数を得るが、本出願では、其処迄する必要も無い。単なる高圧放電の応用で充分である。私は、現代物理の理論付けに疑問を呈する事は有っても、その実験結果(事実)を覆るものではない。寧ろ、現代物理以上に、大事にするものであるが、従来の認識では、捉えられない事象が存在するものも確かである。そうである以上、これを絶対的なものとする訳には行かないが、その角周波数がどれ位になるのかと言うと、かなり低い。これ迄のところ分かっている範囲内では、極性スピン速度は30 cm/sec位と言う事になる。と言う事であれば——これはちょっと飛躍した表現だが——機体外部は内部の全てを代表する事になるので、機体を回転させ乍ら放り投げて、方向が安定していらるだけの角周波数を持っていれば良い事になる。そこで大体、安定して浮上する為には、数Hzから数十Hzも有れば充分と言うことになる。MHzからただのHzへと、10<sup>6</sup>分の1(百万分の1)程も、必要な角周波数が減らせるのである。ところで、惑星間旅行に於いて、共鳴原理を唱える科学者も居る。勿論、彼等の挙げた成果からすると、その共鳴場がどう言ったものになるのかも知らないで言っているのは間違いないが、我々が過去に学んだ通り、共鳴現象と言うのは、音波にせよ、電磁波にせよ、遠隔伝播や増幅と言う点で、際立った特色を見せるのも確かである。実際には、位相の問題も有るのでそう簡単には行かないだろうが、地球のシューマン共振に同調させる事は考えるべき事である。実際、UFOの飛行に用いられる地球のグリッド・システムは、そういうものの上に成り立っている。それは丁度、本発明に必要な角周波数の範囲でもあり、主に8~12 Hzの帯域の周波数である。と言う事で、機体円周方向に於ける放電電場、乃至、磁場変動の角周波数をこれに同期させるならば、磁場変動式の場合はその儘として、平均的形状比を持つトリガー・コイルを用いて電場変動回転の場合は、機体円周のトリガー位置での駆動周波数が凡そ80~120 Hz、トリガー位置を機体半径程の所に設けるなら、40~60 Hz程の駆動周波数と言う事になる。これは自然、「UFOが近くに寄ると、ブーンと言う、低い唸り音が聞こえました」と言う、UFO目撃者の発言に一致する。勿論、シューマン共振に無理に合わせずとも、近隣の帯域である事に変わりない。これで後は、寸法や構造体の比率など、現場の技術の蓄積のみとなり、特別な計測機器や技術を持たない市井の人間にでも、何とか手が届く実験になった。これなら、第3者の思惑が入り込む心配も無い。純粋な個人的興味から、現

象を実験出来る様になったのである。特許出願より先に、この発明の概要を話した所、期待を持って実験に加わろうとする人々が既に出てきている。精神が充分成熟していない人々には、簡単には教えられないノウハウを我々は徐々に蓄積して行き、そして、現実に浮上する円盤を大衆の眼前に示す事に成功するだろう。経済的自立は、精神的自立とは殆ど一致しない。精神的に未熟な愚か者でも多額の給与を得ている場合は多いし、逆に、精神的に成熟した人でも、金銭的に貧困している事は多い。これは、現代自由経済主義の残す、最大の問題点である。ともあれ、何れにせよ、後は、我々の熱意と忍耐、現場の技術の集積度が、時期を決定する。本明細書と図面が有れば、真に聡明な者は、自分でも充分、浮上する本発明を堪能出来るよう。

【要約書】にも記載の通り、或る実験では、既に幾パーセントかの効果は上がっているから、それは確かである。だから、この事が理解出来て成功しないのはハッキリ言って、その人の能力不足か短気の成せる業である。しかし、この出願明細書で若し「まだ分からない」と言う人が居るなら、それは主に二つの理由が有ろう。その人の理解能力不足と、私のボキャブラリー(語彙量/表現力)の限界である。本当は、それ以上に重要な意図が一つだけ有るのだが、それは、本明細書を読む人が態々知る必要は無い。また、私も己を悟った完全な人間ではないので、それを今後の課題として残す事は容赦して欲しい。

【作用】大まかには既に記載したが、本発明は、少なくとも正統科学では、地球史上初の『反物性』、及び『ポテンシャル・エネルギー』の現実的獲得と言う事になるだろう。従来は、現代物理観からは理解出来ない乍ら、確かに生ずる現象として、これ等は発見されてきた。しかし私の場合、その現実的実施形態としては、その後数年を要したが、理論的には、既に十数年前から予見していた現象であって、或る程度は、自分の思う様に操れる類のものなのである。本発明に於けるポテンシャル・エネルギーの作用としては、宇宙空間の移動に用いられるであろう。真空の中で、何の反作用としての噴射も無しに、宇宙航行を可能にする。その比推力については、今は未だ、何も言えない。しかし、現代のシンクタンク(超頭脳集団)である、カリフォルニア工科大学の核エレクトリック推進『ヘリオボーズ』や、ロス・アラモス研究所のバルズ核融合ロケット、イギリス惑星間協会の『ダイダロス』、NASAやAFAL(米空軍宇宙研)の反物質ロケット等とは比較にならない性能を持つ、と言う事だけは言える。尤も、現時点では、反物質ロケットの実現も来世紀初等と見積もられ、他のものについては何時頃実現するのか、見当も付かないが、何れにしても、これ等の考案は、皆んな、ノーベル賞獲得範囲に有る機関の、真面目な考察なのである。だが、それ等の公的機関には申し訳無い事に、それだけ有能な科学者が知

意を返らしているにも関わらず、出来なかった事を、本発明は、一気にそれ等の能力を上回る効果を発揮する。それは、本発明が惑星付近では反重力（正確には斥力）機関、即ち、二次元対消滅機関であると共に、宇宙空間に於いては、『場』推進システムだからである。とはいえ、この機では、本発明も時空跳梁の壁となっているローレンツ因子の制約を免れるものではない。一方、反物性と言う面については、惑星上空での飛行に用いられる。惑星に反発して浮上するので、横方向への移動には、殆どエネルギーを消費しない。ほんの少しばかりの傾斜地にボールを置けば、隙間無く転がってゆく。本発明の場合、この傾斜に相当するのは『力場』である。位置エネルギーが不足するなら、それ以前にその分を補給してやれば良い。つまり、浮き続けるだけで、その場に留まる事の方が困難な位である。似た装置はNASAにも有って、この場合は、『空気圧』で地表から僅かばかり浮いて摩擦を無くし、宇宙空間の予行練習をする為に使われている。この装置を『5DF』と言う。この装置に人を繋ぎ、横から軽く押してやると、それだけで面白い様に速く迄、行ってしまうのである。形状は、惑星上空で用いる場合は薄い円盤型が好ましく、宇宙空間での使用では円錐形が良い。それは大気圏モードの場合の基本が、浮上後は、横へのスライド飛行である事、宇宙空間では、機体上部へ向けての航行になる為である。

【発明の効果】これ迄の所で自然、本発明の利点は述べてしまった。しかし再記するなら、本発明は、遠隔地への超高速移動、及び、宇宙航行に於いて、これ迄考えられてきた諸々の手段を一蹴にしてしまう程の機動力を発揮する。しかもその稼働自体はこの上無くクリーンで、エネルギー消費も格段に少ない。エネルギー源に何をを使うかは、また別の問題である。これは近年注目されつつある、F/E（フリー・エネルギー）機関の一種で、その機では発電機と言うよりも、モーターとしての機能を持っている。その移動能力は、最新鋭のジェット戦闘機さえも上回る。そして失速の心配もない。これは過去多数目撃されてきたUFOの行動力を見ても充分、予想されようが、あれは期待や憶測の見せる幻などではなく、実在の装置なのだ。それは直に証明されよう。

【0003】基本的な原理の説明をし終えた所で、今度は図解説明に入る。図1は、機体の構造を表す、平面断面図である。特許請求の範囲に記載の通り、本来、機体の形状は特に問わないが、理解と説明を容易にする為と、これが一番自然な形態であるので、此処では取り合えず円盤型とした。図1では、機体1)の縁の円周方向に回帰磁界を形成する様、界磁磁石(コイル含)2)が設けられている。永久磁石でも効果は出ようが、常伝導磁石、また、超伝導磁石の方が、ずっと強い磁界を発揮するので、此処では磁石をコイルとして記載した。機体そのものに回帰磁界5)を自然形成する様に帯磁する場合も有るが、制御の点での問題が有り、何の憂いもない

ので此処には記載しない。また、この発明に限っては、機体1)やヨーク部3)は、帯磁させられる材質(磁性体)を用いる。これは、磁場変動に応えるものとして、軟鉄材の様なものになろう。この界磁コイル2)は、全体を出来るだけ均一に帯磁させる為、幾つかの各単位4)に分かれており、その磁界を機体に伝える為の界磁ヨーク部3)で機体に繋がっているが、各単位の磁界強度を回帰磁界5)の方向に変動回転させる段階でも、浮上した機体の姿勢制御は可能である。また、このヨーク部(ポール・ピースとも呼ぶ)の形状は、機体の内側へも設け、出来れば図1・図2の如く、界磁コイルを包む形でヨーク部を構成するのが好ましい。また、内部磁石(界磁コイル)の磁界の向きは、界磁ヨークを通して機体に伝わるので、通常の磁石が生じる磁界の様子と同様、必然的に逆向きとなっている。こうして界磁コイル2)とヨーク部3)は、全体として、機体に環状の回帰磁界5)を形成させる。機体表面各部で磁界の向きを見れば、この図の場合は、矢印側がN極となる様にし、なるべく均一に方向を揃えたい。また、これが虚量物理観の言う、『磁気単極』状態である。余談だが、磁気単極の発見はノーベル賞のものであった。しかし、実際の磁気単極とは、従来の物理観が予想するものとは、似ても似つかないものだったのだ。こうして機体を帯磁させると、図1・図2での如く原子の極性スピン、即ち、回帰磁界5)が環状に並び、原子レベルでの軸性スピン7)が機体上方から見ると図1では放射状に並び、機体横から見れば、図2・7)の如くなるが、これは極性スピンの方向が固定された原子の電子公転軌道を代表するものに他ならない。例えば、一つの電磁石が発生する磁界が、実は、鉄芯に生ずる、数知れない渦電流のそれぞれが生む磁界を代表する、と言う様なものである。さて、図2に於いて、次に、機体外部に設けられた上部陰極6)から電子を陽極群8)へ放電させる(ご承知の通り、電流の向きと電子の向きは逆である)。これによって原子レベルの軸性スピン方向を反転した向きのフィールド(力場)を構成してやるが、この時、普通に電流を流したのでは、当然の事乍ら反転しない。其処で、放電が機体表面外側を満遍なく覆う様に面放電させなければならない為、機体は非常に静電氣的性質を帯び、面放電を行う事から、その周波数は最低100KHz程度は必要になろう。実際には、これも表層電流として流れて貰いたい訳であるから、もう少し周波数は高くなろうが、これには既述の通り、高圧コロナ・アーク放電を用いるのが、最も単純なやり方である。但し、これ以上は記述しない。既に、理論的な事は述べたが、この発明に於いて、機体頂部から放電されるのは、普通の高周波電子流である。重力波等という大逆れたものではない。この放電が、機体の磁場と関わる事によって、或いは前項での様に、反磁界方向へ高速回転する過程で(非常に特殊な理解ではある)、この特殊な力場は生ずるのである。そ



いう意味では、「エリア51でUFOを研究した」と述べたボブ・ラザー博士の重力波説は大嘘であると断言出来る。本発明の実施の仕方では、図2の如く、機体上部に設けられた陰極6)は、絶縁部9)でワンクッション(途中で絶縁し、一度、空中に放電する様にする)を置いて行く。これは平円型ないし球形等の陰極電極6)でも構わないが、何れかと言えば、アンテナ状に突き出した方が、力場の構成には有利に働く。この放電が、機体表面を完全に包む様にしなければならないが、此処で、その放電は、回帰磁界を僅か乍ら相殺する方向に磁界を生ずるので、その放射状の放電を、図1では、矢印5)の反対方向に回転してやるか、界磁磁石(コイル)の磁界強度に部分的に変動成分を持たせ、それをこの矢印5)の方に回転させてやるのが良からう。その電子流は、僅かにアルキメデス曲線を描く事になる。結局、この発明の浮上を全て電氣的に制御しようとするなら、駆動電源部12)として、界磁磁石コイルの電源と、高圧面放電用電源を、そして更に、この放電場を回転させる為のトリガー11)とその電源も用意しなければならないかも知れない。しかしこれも、図3の様に、機体縁に備えた回転リム14)式の放電チョッパーを用いるなら、その限りでない。三回対称の陽極群を用いる場合、回転リム式放電チョッパーは、四角形や五角形とした方が良い。一方、これを界磁コイル2)側の制御で行う場合には、トリガー電源は必要ない。が、今度は各単位4)が生ずる磁力を変動・回転させなければならない。此処は、実際の実験をしてみないと、私にも断言出来ないのだが、理論上、本発明に限っては、基本的には回転リム14)やトリガー11)は必要では無い筈である。今は、何とも言えない。この回転について言うと、手や何かで、機体を機械的にブン回しても効果を生ずる筈である。制御方法には非常に多くの手法が考えられるので、ここでは列挙しない。そもそもその手法とは、例えばその制御を機械式ではなくて、電気式で行うと決めた場合、「リレーを使うか? それともトランジスター、いや、サイリスターにしようか?」と言った程度の、枝葉末節な話なのである。だから、これ等を全て図示すれば、恐らく、三桁近くにも及ぶ枚数の図解が必要であろう。これは、現実的には、実用化の際の『簡便さ』が決める要因である。一方、浮上後の姿勢制御としては、基本的なものとして、主に三回対称(ラグランジュ対称=正三角形を成す)の陽極群8)を用意するが、これは機体外部に突き出していようが、内部に収められていようが、大気圏内(惑星上空)では余り関係ない。宇宙では、別の手段を講じないとすれば、内部に収納する。「それは機体の形成する力場と関係が有る」とだけ、言っておこう。また、複数有る陽極群による力場の制御にも、陽極群8)を、機体一階側下部との隙間13)を拡げたり縮めたりする方向に伸縮して調整する方法や、陽極の位置を円周方向の内外にスライドして変える、或い

は陽極群8)を機体中央隔壁(二階の床)側でカメラの三脚の様に一つに纏め、その接合部(支点)から外側へ広がる角度を変えてやる等の手法が考えられる。この様に一階側は、姿勢制御の為に稼働時、高圧放電が散逸しているので、人員は当然、二階側に乗る事になる。基本的電源部構成は、図4として記載した。駆動電源部は割と低圧・低周波の界磁コイル駆動部と高圧・高周波の高圧面放電電源部とに分かれ、界磁コイル駆動部は界磁コイル2)へ電力を供給する。既述の如く、此処で姿勢制御する事も可能である。また、この電源をトリガーや回転リムへ分配しても良い。一方、高圧面放電電源のマイナス極側は大抵、直接陰極6)へと導かれ、プラス極側は10)姿勢制御部を通して陽極群8)へ導かれる。電子は陰極6)から機体表層を流れ、次に機体底部から浸潤して、隙間13)から機体下部をグロー放電の様な形で陽極群8)へと帰ってくる。この図の場合、陽極群は至極単純な機械的手法によって制御可能なので、細部の記載は無い。こうした磁界の中を放電すれば、当然、電子流は歪められて、充分な高圧加速が成されていなければ、効果に支障を生ずる。そうした時の為に、充分な閉塞回路的放電経路を用意するし、時にはトリガー11)や回転リム14)で放電の向きを回転制御したり、或いは界磁コイル2)の各単位4)を位相変調して、その放電が条件を満足する様に、今度は磁場を変動回転させてやるのである。電源の構成や姿勢制御方法も、原理からすれば、この様に付随的考案であって、この原理を実地に実験しようとしただけで、数十、数百のバリエーションが有り得るが、原理は『ただ一つ』しか無いし、他のバリエーションについては、既に、前編で触れているし、理論的な事は論文も有るので、同様とする。本発明は、原理も現時点ではちょっと難解であるし、かなりの電圧を有する高圧放電を用いるので、玩具としてはいささか危険ではあるが、構造としては非常に簡単なもので、キット(模型)化すれば誰にでも作る事が出来る為と、周囲の助言から、取り合えず玩具として出願する事にした。確かに、多少危険であると言う点を注意すれば、我々の視点を、この狭い地球から、遙か広大な宇宙空間へ解き放ってくれるだろう。後は、実験で試行錯誤を繰り返すだけである。完成したら、何と夢の有る玩具となるであろうか……。

#### 【図面の簡単な説明】

#### 【図1】平面(水平)断面図

- 1) 機体
- 2) (回帰磁界帯磁用)界磁コイル
- 3) (機体帯磁用)ヨーク部
- 4) (磁石)各単位
- 5) 回帰(環状)磁界方向
- 6) 陰極
- 7) 軸性スピン方向

#### 【図2】立面(縦)断面図

(9)

特開平4-276286

15

16

- 8) 陽極群
- 9) 絶縁部
- 10) 姿勢制御部
- 11) トリガー
- 12) 駆動電源部

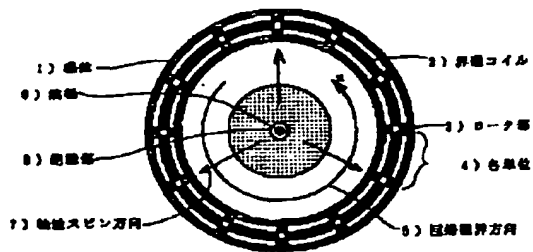
13) (下部構造と陽極群との)隙間

【図3】放電方法応用断面図

14) 回転リム (放電チョッパー)

【図4】電源構成

【図1】



【図4】



【図2】



【図3】

